誹諧手引種

坤

へ 5
1936

へ 5
山鹿文庫

誹諧手引種下

一陽井素外著

山鹿文庫

発句小脇附る事、先著述諧根源事ハ一ツ大事也、必ク
昔連歌ハ長短となく、他のよくかけてをいひ続て
三十一文字となせし也、其よく調ひ歌一首とかしハ上句
句ハ下句句ハ上句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ句ハ
見えて、見発句ハ章をおさ次題を出せ
等しきれ其後中むかしと成てハ五七五ハ其言ひ叶
ハ発句ハ章とあてハ一首とし又ハ句ハ句ハ句ハ

往句なきハ片句と申し侯へ共連歌若狭守集ハ
片句発句と毒抜ハ部をなしてさ仕なるべい戸初学の人
発句ハ脇を付夫ゝなれ侯こいしい待て五十文百員とかゝ和
連歌と云ものあるなれ連歌ハ歌一首の上しもとを二人まて
よりしとゝ申し侯但見神代よりありあるまゝなれ連歌と云名目ハ
金葉和歌集より始てのせられ侯なれ物語五十句百句も
日抜し書〳〵ハ根源集を見るべし

脇之付方句之事〳〵方

脇の付方ハ右ハ云ゝ歌の下ハ句あるを発句の云伝へ
かゝるハ其作者ハ尋ねゝとよく解しゝ歌〳〵連歌あるき
事なきハと連歌と物ゝハ又其道の法あるも相對附ハ添
附違附公附比留比五ツ也発句の体ハ書事ハ今世
聚歌句なれハ公附ハ添附ともゝとゝ云ハ公附ハ発句ハ
公ハ附ハ二句からめ附方也ハ添ハ其場他の人又附作ハを
添て附相對ハ発句ハ結ひ物ハ對ゝ云て附遠ハ付ハ也
遠句と遠ひ物のゝ句の附ハ中ハ業なるなれ比留ハ発句の
附方ハ去ハりなと物なる事を附又初歌ハ仲哀ハ不定なる

発句ハ脇ヲ其時節の定まりなるを以云脇ハ名留
とて物の名或又ハの動くさる文字ヲ用ゐる也後句ハ
中ごろ又動く仮名又てにをハ用ゐる也脇ハ脇と学ひ
くさ民間流通俗志ハ後て発句ハ慣かする切字をよく
振とハ文字ヲ用ゐて留ハ外とせめ人ハ和らひ美を
極めんとも此道相伝の人と雖是故実也又昔より切字の人
思ふ〜変ることなふ振乃てにをハ留ハ文字留或ハ定
まる仮名の外ハて留ハ稀なる人ハ也も稀の事なり

脇ヲ五體

水底乃影や大地乃きさもうつり　望一
独吟

相對

鹿の角ゑとりなさ山川
発句大地の景ハ下ヲとりけてせ也水底ハ大地
景ハ鹿乃角と相對せ也

雀乃巣ハ四松ハかくれかさり景　友仙
仝

蓋の尾ハ仙人ハ蓋原の景　季吟

発句脈にも如何ゝる通ゝ也かゝらんと宿の草に
叶しゝの紫と亀乃尾ふ毛ゝ人宿毛ゝ相対也
やゝゝゝと自ふ梅や自分乃やゝゝあゝ也　梅菊
独吟
　　お添
亭主八見ゝえ無夷也山里
発句八梅と見ふ語ゝ人のあるふ其義の自ふ八自分ふ
ゝあゝ挨拶ゝまるゝのあゝしゝ也脈八山家乃事なれ戸
さしもせてあゝしの出ゝ疑ふ其語を流ゝ也
市中八も共自ふひやなつゝ月　几兆
三

仝
ゝゝしゝゝゝゝゝ也夢　桃青
発句市中の夏八何ゝ共自ふ暑き花脈八其つふ
立て独こゝし風を立ゝを添し附也
藥薩屋も心ゝてゝきけかゝゝき夜　梅菊
　　遠附　　独吟
油しめ木も志めふ夏乃夜
発句八杜鵑の声ふやゝゝんあるのかしまけれハが
心ゝて海もきけよゝゝ脈八夫ふ引人他ゝあ本のゝちや

[illegible]

其まゝ人に杜宇や是ぞ佛ぬしの白し　香室

柳さへ自由ぬ[illegible]ぬ[illegible]

仝

夏日を隆に[illegible]毎乃[illegible]　蒼狐

発句は暑の風なれ[illegible]き柳ぬ[illegible]脇は其の

暑さを通れば[illegible]根ぬ掉きせ[illegible]

武を水に乳のまし[illegible]む[illegible]暑涼遠ひ付

川面ぬ楫[illegible]ぬ[illegible]乃夜を可那　仙化

仝附

月[illegible]雨　其角

発句は[illegible]を楫の詞も秋秋は[illegible]

[illegible]は発句を時雨乃[illegible]

八里乃[illegible]

仝

やりまて殘る[illegible]枯の月　初代　秋瓜

発句は[illegible]

其詞ぬ[illegible]

ゆくすゑも更ふかき月　　希因

比留

夜も暖氣乃清ミ川る比　　涼佑

発句八孫殊ゝる水面の越流まも実ならさる哉

扨其時俳を除生の比ゝて清の河力あるれ

蓮ふ似て義士宮居乃ほゝ除の郷　　蒼狐

独吟

仝

扇の芝も香ふ暑きゝろ

発句八宇治の蛍倉戦世ふ勢る形蛍弱ゝ〻ゝ杉花

遠ふ八芝ふ地ゝ名自中言外ふ慈暑き餘情

あまゝゝ彼扇のせゝも芝いきれゝる比ゝ好ゝ

東三の句俳方并句乃業ゝ方

東三ゝ事連流の書ふ紀ゝ伝ゝ云ゝ業に

へゝ比ゝ之ゝ乃ゝ句ゝ公得ゝ人ゝ者ゝ八ゝ比ゝ者ゝ乃ゝ比ゝ哉ゝ

ゝ者ゝ乃ゝ花ゝ芝ゝ著ゝ世ゝ乃ゝ古ゝ人ゝ乃ゝ句ゝ乃ゝ比ゝ俳ゝ者ゝ

ゝ句ゝ八ゝ宗ゝ角ゝ人ゝ俳ゝ八ゝ要ゝ乃ゝ比ゝ句ゝ乃ゝ比ゝ者ゝ

ゝ乃ゝ比ゝ者ゝ句ゝ乃ゝ比ゝ者ゝ句ゝ乃ゝ比ゝ者ゝ句ゝ乃ゝ比ゝ者ゝ

ちるも作用のこと法華ホ説聖句立てかるゆハ拾も日拾
ならはなと到深行し左ちれハ書こをちらくしとちへきれ
発句脇も拾く来る時ハ書こホカと入て仕立へし句の長
こるきハ茶ホきくつあホ書沢一句の歌の事也叙留ハ名ホ
云て留又ホて留と常ちきもしもしもしろ俳名折合併紙又極字ゆ
ぐとすくに留ちに留ちに留ちもはしらん留ハ結ひのてホはと垂く
きもし俳句と用ひさしれハてあはくうにて句ちきホ言ホなら
さ字もこゆきれ世丹ひろくの俳名ホて留又文字ホても留し
古人の作例あまと成云初学のこり種ケ色ハ都て書ケ点

六

ホ〻紙恐まて宮ホのせさると知ハへし

て留　にて留　で留

何つ〻〻くとつ〻〻ろ春　奈来

二番茶取も果さ沢稲ホ出こゆ

発句脇ハ右ホ注ちきこハ早苗ろき来ろ万いつちも

早く六月ちり農業せけき案ハ左ケ暑ろ

ちくら咲こと〻ホ海陸ろ彼岸こホ　支考

かちこと法中ホ仏ゆも晩蓮　独吟

湖乃水助くるゝ畔ぬれつゝ

発句ハ元々乃至小儀小海陸杉む詞とうけそゝ脱を
添ハ其そうき世の産乃義の中小々すも者乃清ま
ゆゝ出ゆ井三ハ助くるゝ湖乃の業又廿縁通ア人
梯ぶ一の田の畔塗ゝ元ま妻乃農事ゆし八秋色

紅梅やしくまも杉ゆ所おの内ら　乾什

疎ゝ乃ゝ人ゝ色ゝ人ゝ色ゝ　舊室

鮒膳ゝ乃ゝ紅も杉乃餐けあゝ　局菴

発句ハ稲荷の山乃もゝち梁の本欲ゝを元ゝ所あゝ

加ゝ色ゝ詞ゝ乃ゝ元ゝ咲くゝ人ゝ乃ゝ元ゝ梅乃歌小者
ま乃ゝ是ゝ小ゝ添ゝ心ゝ世ゝ三ハ廿人乃餐けゝ陸ゝ膳の
細ゝら杉も杉の事有元

清ゝ乃ゝ日本けゝ小も杉乃ゆき　蒼狐

月ハ移ゝ市中乃清　宝馬

首途今ゝ三ゝ乃ゝ酒の果やゝて　二世 占凉

発句ハ江戸乃ゝ中ゝ小ゝ海文ハ仕ゝ来も稀なゝ元
脱ハ陸ゝ乃ゝ中ゝ月ハ移ゝ清ゝ乃ゝ移ゝさゝならぬ市中ゝ
杉ゝ元ゝ遊ゝ附ゝ者ゝ三ハ旅ゝ三ゝ乃ゝ別限ゝ元ゝ告ゝ小ゝ名殘の

盃果しなきあや但山でハ果やらぬ事也

に笛

神ぬ木を主めぬ所ぬ川の秋　梅翁

木綿枝ぐるとむもとく降雨ぬ　独吟

発句脇ハ右ぬほと貴ぶこそ雨の大粒ぬ降ぬるハ

笠ぬ乃秋々しきを又脇遠附加ぶ〻深ぬ侍さねと

寄ら是也

ぶ、こうらぬ風一日吹てとろふけて　圍友

鳥をまぬ所里乃春籠　乙由

於うけてむ〻れたる乃うぶ〻しぬ　支考

発句ぬをなくて夜いぬも風なぬ脇ハ時雨を

侍ぬ〻ぶ〻ぶ春蔭の小夫日和るの秋ぬ時ぬ〻し勇

ほし但ぶ〻ぬに笛上へまハらぬやうぬ和ぬ笛ぬ事也

も古し笛　ハなし夜

昔城やと胡うけ出のかゝぶ所　尹督

若葉おうしぬ〻ぶ〻ぶ〻ぶ月　来示

第月の浪ぬ生ぬへさぬまぬぬ　蒼狐

発句ハ葛城の山杜鵑ぬ〻ぶ〻ぶ山の俤浪吉野の方

より大峯山上にて無形に出るとかけぬけしと云共同伴
うかれてかけ出と迚も眺ハ境に時候時分の景色を
はしらハせるべき為もなしと相違めの俳句
海棠や入相乃鐘も撞かハ法けり　初代　左篠
来さて見ぬ人ハ別荘乃夏　佐保丸
出船風帆屋ふむと雲ハ忘し　蒼室
発句ハ後の契ふ絶るを眺ハ夏の名雪の
本歌を見ハつけとかいふるとふ別荘乃題ろ
眺ハ昔の情を添ふ絵を水楊とそせり見

らん留

春人乃ちるふ名や雪乃うね　専吟
柳ふさして川を流蟬　其角
百草の屠や花陰ふかこるらん　佐徳
発句夏雲奇峰の姿暑ふハ夏人猥ふ名見てもけ
ふ猶ハ見もせを物を添ふ人寄ふハ情年ふ嬉ひ証
猶され人多の幸ふまして嬉ハ咲ほこるらん蕉翁
寒梅や將乃ちるらん不忘よる　佳風
山をうしろ法屠ふらし　屠蕃

曲げ菴の漁村も幾代経るとぬらむ　才麿

発句八十月ふきく梅を先うけふれてかの服乃気とも
思ひ寄る紙衣脱ぎ捨て荒風の中ふ悪きさる働き
見て公務くすと曲り菴伏き蔵入漁村も山をけろふ
風を防きていく代ぶるぬらんとなる也

脇すとこころ表八句業一方に季挙し字事
脇すと附方八名ふかを位例を以て工夫るべし又云発句哉
留の持ハすとふて留とせ説法ふ通とぬ事ハ不苦とい也

其外別むつ已先んせぬ方可なるらん乱又発句ふ賦物ある
時ハ也字を すとを 挿ふ 仮名 ふ 仮名 の事も 初 然 席 上 の 作 家 又
功者ふうかしてもくき也　四句めハ句作も留ともなるくもし
されと極めてしたて留るしてふハ悪さうな　五句目ハ
すとを乃留ともを乃合せてもし但すとらん留もし留の時
て留ふ事ともいと是亦極てさる事ふもし　六句め七句目
無体表八句ハ連歌とも表風俗にて句作よ公得るとも物を
一ツ宛ふ一て句を軽くてふはぐちよ留べ程をく植物山野田圃
生類降物食類人倫人事居所都會村里覇旅宿駅月水辺

是等発句ふようとて日物二つきさる等挿句と配て句集ニ
八句めハ秋やとくしと四句めハ日抵ふん得て宜しきも但表ハ一季
ゆてもこ季ゆてもくるしからさるとこ又八句ふゆとゆきりの
神祇釈教恋雑常述懐々旧哀傷名所人倫名同字無是
名の綱公筑紫越路等まとせハ又同字別吟旅乃文同夢
同恋味覚等の句又京ことやこのづま鬼等のこと又春とと
ゆく秋しこれとこれハ苦しからハとこされとハまた字我加ふ
なる事と無まくされハ同字を通ましハ又京坂東等の字とハ
只文字の事のこふて名所ならぬ等ふハせハ又鬼ハもの

等鬼瓦等鬼神ふたのらさるを申ることなし又春廿四季
とあるハ教ゆとし後ハ次連懐無恋の性と連次春も恋
春、入等恋ふなる句ハせハ俳表の句作ハ源きをもぬと
只等只ハいつまとも所きと文字なれハ同くハ所ともの事なり
又云 九句目十句めハ何ちら移ゆと二三の句と連歌ふてハ本十式表十
句の法ふ敬い裏へ移ゆと二句目をハ今も表の通ゆと五移ゆ流儀
も法人事ふハ口抵しとされ式の表ハ句とあて臣し
法師ハの人くゆ恋を考て中ゆとゆき教ゆ集ゆも連歌とかう
九句目くゆと何ゆても苦しからハとこのゆと当流通俗志ふハ裏と

惣ての事は法式師説ハうら〳〵と也て雑季無きにせさる
句を出さんハ侍らねて若くハ嫌ハ一句ハ仏してもよきか夫も其席
又句にも寄へしと也又季移りしにも季なき是ハ同季と同季
廿句去なから中に他の季の入さるを嫌ふし是も季なき十句の
法にて廿句隔くもせぬと甚今世ハ心のまゝに八其季を遠
是のミならぬ連歌も本式新式にて其法かくるゝ事を遠
隔く法式にまさる文師に寄て学ぶへし

附合　親句　疎句　四ツ手附　取成附

親句疎句之事上巻発句の條に委せり然ルに猶附句も
二句の間に在る親句ハ前の詞に寄て親しく附疎句ハ詞をよそに
まて心にて付る之事在疎句ハ附心表に顕さす疎句ハ底意
内にあるもの也親句ハ教え疎句ハ悟之と於て又四ツ手附と
いふ事是ハ昔附ものを四ツ手と也し時の事にや寛永の頃よりや
嫌ひしと見えて今連歌の方に連歌の句を引て其後秋と
あるをこゝに置青葉紅葉と附をを嫌ひ其後方山々暁山菓
にも同連歌に山と精を結ひ句に峯と松を附るを
出さきにて初学には四ツ手と親句の境まちかふるを　親句会然

縁ある事を以て付四つ手ハおのれある事を並て附るよし
此れを嫌ふ也又取成附といふ附方ハ見るも其縁の外なる様に
当時ハ此附方も又あるなれ先師云連歌ハ浅けれども宜し寄もある
外をせずハ活きたる附を以てお哉を調る事多し作て文
群出の句もあるなれ流行ハ附広き事成て外に及ぶを以
お哉を附て附方あり只し遠く見ゆるに飛寄作ありハ
古体なきにも此次第句ハ根ふかく脉し有るハ未練の
事しと也

親句之附方

家ハ汚くましく破れやすきによ
きうふ乃菴菖ふ京をとゝのへけて　宗鑑

家を造るに蟻の巣らけるし附破れやすきに
たえ終とかゝりて親しく附之

五月雨に久しくともちへもむすせぬの
ハ田乃早苗をまきぬれ　梅翁

さゝこれに子苗久しくむめふ五緑し附たりハ因只
他出せぬやよ寄せし其句とも安らかに附細やか也

詠句と附方

詠句の附方乃事ハ存ぜず迚一通ハ也次ぜず事ハ西道皆
詠句ハ歌家ハ句をもて歌ハ付合を又人ハ考ふ又今ハ力ハ
詠句乃附合をもて是を風体と云ふ西ハ人も所ハ異思ふ
桃青ハ徒蕉門蕉風ハ云ハ唱え混もて紅葉義抔又京風ハ
詠ハ云て正風体と云歌句のみ行ぬる時より一流ハ事義
又貞徳より流儀乃連歌と云ふ梅ハ蕉ハ皆連歌師
なれハ今連歌を所人の賞せる詠句も有又え禄より始乃
附合を連歌ハ云て時ハ出そうなき句多ふ

四ま附と名附一分句

連歌乃ゝ所雨ハぬまけて

傘のさしにくひあるてかしもと成　宗鑑

貞徳定ハ句の脇出単附用附雨ハ傘も
付ふ所と但ハ付ハ附ふ雨ハ傘と云ふ
ハやさ所を所ハ晴ハ所ハ出句の類歌家
載を曲所ふて傘二句云又傘をかさ
連歌を付ハ也ふ合の不用ハ云ハ是ハ
歌一

取かしの附方

おいてあまたしたしくふかめて　宗鑑

姉乃子供生るゝ時姉妹子皆女あて始のゝ
生出を聞でとゝ元かゝり姉妹子皆女あて始のゝ
友男あて二のまきしゝ彩ふあや
親乃うゝもをこゝろよくあ
若所をやけて行ふなるとあく　雪吟
釈の歌を親所の書き行ハあふかゝてよく利
しゝとゝ為り若所ハ和ら為てハぼやけて行の

用法ゝ我ゝ歌句とも名人の仕ゝかゝて出き
名和の論もあゝきかゝ

附合道ゝ附方并ニ八品七名八体ゝ事

連歌の附合ハ四道乃法ゝ添付又隨離又放逆ゝ添ハ句
山ならハ流水ゝゝならハ島といふやうふ添て附付ハ句ゝ
暑ゝゝふ寒ゝ林又人ならハ其人の事ゝ陪ひて付離ハ句ゝ
ならハ私家ならハ沖ゝ旅行物ふて附やうふ棄逆ハ句
ゝならハ風月ならハ雨ゝ爭ひ歌ゝる物ゝ者合よく

附ク但家ヲ以ハ夫ヲ主ト為シ非次ヲ主ト為テ何ト
何ノ為ニ附キ也故一巻ハ右四ツの附方を以て信ク句のうち
ヲ以テ申ク也又巻末四句武ハ品位附ヲ寓言風情
者てなすむ花ヲてくるを以ハ風ハ何ノ為ニ
後ヲ逐る言外梅を為つ雪家右ハ品ヲ相違の句と寄武
独吟千句の内ヲ撰ミうつし形と題せ集を編ミ文机ニ
つ文考七名八体とるけ附方をもて世ニ伝ハ七名ヲ
有心起情向附今釈迦句名を拍子ハ俳ハ共人世場
時分時節時宜天相観相面影也此外注風ハ有て省

者ヲ二のまとえハ皆四道ヲ分ケ是いつれも附合の
階梯なら夫ハなづく凝る附ハ沖屈ハ落て益ハ心を
労し却ヲ風ヲ失ヲ也や四道の附ヲ以て自他作用の外
ハ一心ヲよく無へ工夫あらハ悟て自得もと人き実地又
初学ヲ以て稚ヲ出ハ附合ヲ以ハ事ハ多ら一句の立かヲ以ハ
連歌ハ以て婦人ハ句の自在ヲ以ハ人ハ世場
ハ人ヲ以て人ヲ附ケ人ヲ知ハ人ハ俗世
我ハ人く素ヲ為ル不ハ人ハ俗ハ世ハ自力ハ
ヲ以て法ヲ学ハ人ハ也ル法ヲ晋子ヲ指合ヲ以て

句者といそがれて八句作を働らかせむなら[illegible]
[illegible]
んに家小四道の附方小者て古人の句をも一倍小句を
得付合を信と熟考して其意味を味ひ知へし

添附

武家めうせても町人乃風俗

[illegible]　　梅翁

[illegible]

天狗のすめる山路さびし

[illegible]　　梅盛

前の慶詠をつかこと[illegible]月の梅八[illegible]葉の[illegible]
[illegible]
天狗小従て[illegible]
添付べし

風雅をさいてるる所大和川

次なる武者の案を挙ぬ　　艾角

前八帝吉野へ迎らせる爵を附八宿軍の士

幸若次第ハ聖運傾き世ハ乱れ乃ち源の六郎
行家と申おりし巣ちと問うくとあや義人の
ちうちとも申すべきなり

土橋ハうち侍こる乃給者　支考

きゝ乃ちう舘ハ舞ハ親おろ

前馬の給まるしらぬ聖ひをいさゆ給ちて
附ハ家内並ハ乃ちの乃ちの目ぐうく入返ちハ
とけて新仏法嬉しさ思ひやるべし
主膳のいゝ仏蟹焼乃ちもしかし

広めを人を追て出る月　春宮

前の蟹焼ハ仏盗人捕へんとちハ竹ちんてゆく
仏せく打ちち島の方ハ月さ昇ちて彼賊を追出
しと附ちう

水節をとけてちうちち恵の道　紀代　尤簾

ちハ悟るもあるち事也と

前ハ水節ハ多くて天乃ちる人あれと迷ちる恵の道
ハ迷ハ害くちらさうあや附ハ生恵とこ疑の中と
見て又偽の人限ハ知いすてる迷と申るめしく

用ゐるは老のくるせし古明筆　蒼狐

虫干の日ふるあるく侯先君の下されの京杯中守て

懐旧の情ともて共打ら古明筆の訪事をふ

金書をおもひ出せ物侍るなら尽と附ら

従附

意ままてふ道ハ雪やら溪やら

一すさびをきろてやふ指　梅翁

一すさびハ雪の歌とうく侯と書て茅舎雪の意乃

雪の歌ひくらふ侯ふ指切と附ふる也

今ハ只起らぬもせ恋ふ

死ぬことくらうを雪ふりしく　昌意

前ハ意ふ夜学まて花も上らさる雪附ハとても

侯ふ花ぬ事ならハこうれ死ぬといふまを一月ぬ

て雪ふりしくしとゝ附合人はてならてふ

ようもふの公ふ仮かようしくれ

飲てうまふ侯い茶ハ雪ふなら

雪ふ来て雪ふ侯ふ侯ふ　共角

前と夜日酒屋の若旦那の侍とゐて酔さめのうきこの
らんまと呼び給ふ物うけ色を見さめて心附しゆや
暁の夏小鳥の火をとかし
さうしをふすらかくるてをい　支考
前ハ思ひき夏やゆらん消ふる雨とくさ色を
起出るふ雨さもやゆ月さを見るまるて
ほるまいふも侍しき作也
夏川さ一枚ふうき名をらまき
腰うけて振さもはまらぬ雨ふる也　京兆

附ハ二夜の契を他ふられて憂名をそハ心なるらん
上ふ夏ハ陸ふ腰あうけ皆らく居ても考へる
なとはまらぬ物ふ人
今の月ハ雪もおりく降げまと
惜うて半と夏くくてもち　梅路
前ハ今降おせ一ゆ附ハそ積らぬ内ふと
半月敵ふ先ふまを惜むふハ何らねと心ゆけハ也
我ふらんうら他もゆこの一き
通夜明てゆ一と尋める香色ゑ　蒼柢

は附合初恋義をまやらん事色義せ一人の
やさしく又其形いもやしく尋ねて逢ふ後し
形の事をも語て合人さきれ

離附

世の中のもの思ひうきしき世ふ出るも
恋ゆるねの井もゆぬきの水　徳元

前今は市世のあるうちは何の上をも其乃ふ秀ハ
用ひらるる所附ハ前の人情を解きて恋ゆるねの井
うそ恋得る事かくき武義神の井も恋ぬきと

此なるハ治国武義

是さく見えしハ二十八日　桃青

えさいかきハ縁小軍の大事也

前ハ廿八日の雪夜別我を是何をも附へきを夜
対ふ見迎て対ふハ前小拘ふらして二句の間趣有
下京ハ宇治の蘭松さ一きまを
坊主の美ふる蓑ハ志ふ一き　其角

前宇治ふ見ふ登ぶ登ぶまや附ハ其事なく仮名乃
俗を附ふる孔要を放れて附小句小流化ふといふ

逆附

蔓延して咲くハ宝家のつらあて　守武

西行さくらうゑけるつぼあり

宝家ハ蔓家也依て蔓蔓を宝家のつらしせる附ハ宝家を西行蔓に横と翻を咲ふうゑけるを逆附と

南無阿弥陀〳〵とて夷れしとも　吉如

法蓮華経〳〵

前ハ改宗せさせ給又陸奥小称名をとゝもとる者附ハ念佛を間と耳ゐも念願目一心不唱ゐるハ者小逆せり

祝ひ乃夜ゐも腹〳〵て上戸

家具の音多ふ如く響く也　蒼狐

前腹を上戸乃ゐ酒祝ひ小祝もて一つまと後ゐハ祝も更ゐ其ゐ〳〵元兵衛ゐ音の鳴〳〵しくめて多く響ゐ多ふゐ如き祝を小多ゐと是を小逆小附也

在上巻の発句下巻乃附句も同人の初学ゐ小人ゐ者ゐ〳〵と思ふを撰ミ祝侍小注解を添ておき依て著く人ゐ小きゝ賞を句ゐも洩せるゐゐを此上得らゐ小せんとゐ〳〵ハ〳〵ゐ〳〵く来〳〵り問へし

誹諧流風之事

今世誹諧流風のそもそも其始め其物ハ宗鑑ニ起て誹式ハ
守武ニ定まり其後貞徳ニ至て大ニひらけ海内既ニこの
道の門ニ遊ひ先さるものハ人重頼（維舟）立圃師を背きて
已々の流を立又當流の祖宗因（誹号梅翁）連歌よりいて誹風
を一時世ニ維舟柳もこれニ荷擔し談林の風調ありて
行れしハ梅翁老後高政秋風為風を我と乱をよりく
宗因もの一句ニ誹諧の口を開て世を連歌ニ於ひ誹道ハ西鶴
其余まて其広まりを待て今とし正徳七世之当時流風猶らく小

別ニ一ツ之一系を引其の始元ハ凡其のこと当流の二流あへし
又始めニ申如く部會ハ其元の隋白ニ郡ハ以梅法発句
之を其道ニ入りと其徳風の祖と考其丘田舎ともに道ニ
處にも家を我つゝに入しめ自然と法を起ちたる式ハ印行して
其書を説但他のやからを禁したれハ初学の者誹諧ハ梳青より
始まるともおもひ伏しまや其餘風ありて今も其徳風を導く
他と風調をまし其の事流宗ニ代ゆ東部ハ万葉乱誹流葉ヲ
誹風も一ツニかけらされと大都会の事なれ偏固ならす両和して変
ぜざる事を合し著述ニも相互の句入集せりいかにしても晋子ニ

ことし栗小ハ祖翁の句をはじめ小重て三夕の露をむすと

西行　秋ハ物の法師もかくの夕かな　宗因

定家　ゑか何常なき庵の秋色夕かな　嵐雪

寂蓮　和歌乃骨槙たつ山乃中へなれ　其角

又其後芦こちかいせし阿蘭陀流に

里人のまろうとゝ名はよばれ　宗因

又此上志にも此如く晋子の雑談集宗因事一句も仇

なるハなしと覚しくて其奥に

まつら露や霜をながら置露　宗因

観念乃上小ハいふべくもなしと嘆美せりと又去来抄子先師桃青也

常小曰宗因なくんハ我〻が誹諧今以貞徳の涎をねぶるべし

宗因ハ此道中興開山也とかく西梅翁を賞美を中小支考

獨り発句文小桃青ハ古池の蛙乃句小兵備を述て貞徳貞室

維舟の梅翁も其上をハいさゝよしと以上の三人を待事もあらねど

桃青を吾つの徒小信せさせむる名人乃人〻を牽て来りとハ

猶やしと見せらうふ小出て蕉門小ハ其嵐をはじめむねくと何

諷士ある小詳六ハ師の秘訣を一人小伝をなし称得てゐまして云限

のありて桃青か道を書く弘めしハ支考此く俳著せずるハ

いかへ不ゐせる自己の新創流し他流まで行はれと又ゝ好
の色〻思ひ〻めゝく疑惑せし所家小学の要を書きから民
柳まつ雖不限ら沢基つ中古帝業流家伝徒限の流式書く伝
其角流の好他不交るまを今つまも婦人とそうり人書右小云く只人
初学のゝ引種なゝら其席不流別の事とも法を何歳会小書沢を流
次第不別まを後基とも知らるゝ為されと又書ゝ上とも
なを来て一家を学ともの別弟ゝ学ゝ者八他流ゝも交ゝを是小見と
つけ非を侍ら沢執ゝ急ゝ事なゝ学ゝ上達せしまゝ高ゝと嘉ゝ思へ
誹諧手引種 下巻終

手引種附録下

添附

ゝも亦あゝ所を八富士詣
近江の湖ゝ一夜 検 校 冬央
家稽ゝの狂ら踊ゝの師匠ゝて 如水
ゝ程乃手ゝの句解を云く
云ゝゝ応ても実悪の友
棒打ゝ者ゝ不悟氣けしゝけて 文栄

家の先祖も利休うり
石灯籠自慢なるハ思ふまじ　亀龍
客ハ帰りて来るこのもう八つ　涼山
今茶ハ只々張さ新ハ起さるまて
囲碁ハ碁石の地もつるぬまと　蒼湖
茶ハ茶所茶へあるもの茶事
茶客ふしぎ芝の伯母白
茶屋茶盆の掃茶屋ものつさくら　嘉玉
日乃稲ハ庶ハ見弱

俳西阿弟子の家ハよりとゝ　所水
彼まても鶴ゑ皿のかしこうる
茶屋百屋小蕗ら解屋乃上戸先　嘉翠
伸〳〵と碓ふ湯上りの酒
同道乃客ても花蔭もしり　其葉
立茶ふ丈も半角の同心家
蓮〳〵碌の天二射ろ書　仙鬼
一の底昇を決法をゆきを
順風を待ちうか兼尼　仙禽

宮殿の小殿東内ホ山乃うら　一鶴
踏ホ生まれて孤戚のホし
一人森のこ人教宮ホ江戸地し　祇寛
きらりくまち侍　城乃天井
壮人の川結ひし　きうら若き　左蕙
生くまよ祭つの　渦ホ赤の火
くくらつ月と　夷ホ　ひらく　廣ホ海
市畧乃よ生ホ　横ろく　朱所　田月

夷かまと又江高乃連う朱
猛乃史婦大さうホ好　大義樹
生和師て人の　ろ　薄店
道夢情ホ　庫堂の　踏ろう　青芽
第ホ猛道乃　皆花風通
見ろ　ホ地の　ホを　庫物屋　寛之
まろ猛ちて　花酒乃　殘堂
七吾ほとホ　奴もあと　上徳郎屋
八幡まつの　利量　紀く　俗　百我

住て孤松を庵をまとけふ放さる歟
定式の通りなれて眺む明の夜　奇峰
九十をとりと曙をせぬ業　可笑
古来稀いやふ事をハいやふして
ゼツ絶しハくらい盃　紅時雨
仏めきの法師をハ他ふやら
振ふ舞くして毋もなめらまし　素北
夏ハ蘭乃香風ハ樋の音
太くり池まく人ゑ不先ッけハ　乗舟

行法川岸へ相かんの音
さゝ波ハ船の眠りを揺ゝ起し　素轉
我ゝ乃ゝと早ちと告る四ッの鐘
蓮乃ゝ人して寺の胡飯　雨簾
夫もふらつと陽ゝ乃ゝ苔
画馬堂ふ菓子ゝ乃ゝ幕の我ゝ乃ゝも　都奴雅
ふこゝとと笑めゝ乃ゝ鶴の素風
如雲ゝ乃ゝ皆の船ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　遥懶
男世常のいゝく永き日

屠蘇の盃目てハ氣を清め邪氣
を払ふ雪添へかてらふ立留る
ゝ心あて寄も鶯さへ啼
春の山吹よりの黒髪
茶ハ山ふきふ多ハ玉川
何の事も屠を結ぶ手
毋しを逝しふ起る弁罠
雨ア明るハ板ア降る急
新らしゝ古歌の枝ゝ夷ぶ

嬰周
春朝
逸外
素久
金馬

永き冬日を囲碁の争い
浮金の差く組付の蝿ふ川
もちはしも古屋ゝ春雨
の月て庫ふ多ふ多ハ氣
花ふハ梅ハ文質彬ゝと
人なら君子宿の粧ひ
のき梁をゝ雪ふ立ぶ春
雪ふ烹ハ屠風の外ふ何を
人ふも笠のうゝちいゝ

可恐
五蝶
分香
仙里

仲の町夕ゆきふハ事も惚き
蓬はうを奏天台く奏の俤
嫁みりうりと又あひて茶屋
花もおもろ〳〵上野日くらし
親ふ家茶侍の歩行やう
反撥を松のまつ風むらら
神る哪〳〵夕〳〵ふらう乃絵
茶屋きらふ秋や乃ら忘世
茶茸もくゝて盛久むしかふて

賀重
沾蕊
赤蘭
操舟
昌舟

江戸紙ふるらいさよりてうも
見足師ハ伊ふ中やふ〜やの市代静
掃除ふくしく奏も静ふさ
簫乃彩の景ふ信を附書院
商賣の毒奏ふくらけふ客も客
猜弱の事て吸ものくの如ふ
孝乃住人彩ふ地乃天ふ知ま
勅使もなのめる岩花乃彩
物和〳〵の小望い老く

曉柳
松賀
赤克
秋策

お妻とうくひを二日洗ふら
毋易の吉凶畫ふハお入医者
霄ハ目ふふ思ひ想新
めりきらと笑も伸ふ為上て
敷中名ふ嘆き陽を
庫和志まくハ捷いふ笑屋
ふも信ハ光のうちて雨屋ふ
冬枯の田ふ立捷の逢ひ道
家も見伸まと川ふ橋ふし

桂岌
洞水
調布
扇朝
袁外

名ふふ評義の所驚乃者
博士分やし考明ふ待
田つ行も所伸くのも小半道
高保匠ふ法廓冠発

白英
規外

従附
中ふ形き形ふらも倚て見れ
捲もよふ織さふふ天人
車軸の中を形新ふ倚ふ

錦車

安達のうへの君後撰極て秋
老ぬ紅乃留やふ庵爰御ゝ
初らふ尺ゝも春抵を親
員てあるのの心ハ狼
朔ゝ[illegible]ゝ神ゝ
反造ゝふ法きてゝ和ゝ人も
漸佳境大津八町
五郭の夜ゝらも若やゝて
入歯ゝ頬の敷ものゝゝ

錦文女
冠車女
升來
袁麿
袁秋

新因も宇発ゝゝる大軍師
耳ゝらゝ麻よ施ゝ老人令
、
大半後ゝなゝふ尺ゝふ
高七ゝの手稜ゝを初灯の花
踊ゝくゝくゝ皆ゝのゝ旅
色ゝゝて寒ゝも思ゝぬ大井川
きゝゝ尺ゝ新ゝ年船の寺ゝ
ゝゝ月を地侍ゝよ老ゝ

蜃水
舟子
袁周
素梁

初春川岸ふせうゝ意中も　壺天

通夜かのゝゝと新年を見合を　亀流

上ゆを一人ハ道ゝかゝゝ体

花をまゝぢゆふ事意外見

七福をを夏を早朝　得和

母親ふ仏ゝ色不器量女形

仏のををるもをつ乃秋の待

ゝしさふこ雨ゝ蛙を乃雪所　鶯朝

むゝ朝安き意ふ深をつけて

嫁の胴ふ病ふ母乃たぬき庶　観魚

新の色接ふ思ゝ日ふも破

庶蔡ふおしゝ見ゝる寺秘義　言外

明のゆる秋もゆのゝゝと山乃ゝゝ

風陸ゆ雅ふ合異ゝ意　意外

ゝ乗ハう月せゝの羽織行ふ

化さゆゝゝゆふ踊きの狐初　文足

てゆきゝ犯ゝむ嫁後を押し

破このさゆふゝ律義ゝゝ　虎夫

鎌倉八幡宮の大山寺にくらべ
惜しき事なれども人を見そくなふ　史山
義経堂の古びたるも不ち地ち地　舊香
墨水堂より丹よりしきに
おとらぬ日うつりの紙を張り
小町とかくる事ハ面白　素儀
板ふき氣なくしるも墨をまきちら
さるもよ艘をとゝせる牡丹　夷逸
出生の岡ちの名物せハついて

振ひ出やうに捜すと穴　藩山
多ゆきしらの羅て来らまと
女房の鬼も高王の佛うら　若然
里まをくさうを聖迦の名高
瓶やちうも爽さを持ちを等　五外
おら解も只今信ふ有云
うちしの所うち物女まらく　花麿
雅俗しらへとはしら人情
道者名も吉野の堂を見ハく　志阿

温泉の旅なるかや保養道く
早乙女ハあまたしまの戸をもて　春瓜
ふるさとを探しの山寺乃見　東水
暮雲の鐘よりらく撞ち所　島朝
あるか人ぞらら見恋原文　花丸
ぜけハ秋さるやめ菓のどうき不
人乃いきれハ茅しいきまたを
伏見あるま秋あきハ見るしらら
元もちらもちらく夜山日

神祭べむ人ハ秋の夫年の歌　五計
暖の場所あて勢見志報光
一さしと拾ふ給ふる陣翁　在泉
笠茅てうけて這入夕立
悟ふハまさ主をくも禅坊を　英富
姫ふハ俗留女黄賊邦部
仏ヶ中の夜を根味の夜祭　社来
和清の故まふ家て黄しし
腹乃書を蛍魚のふらちたくと　素外

糊うまどゝのまもゝ名五の果乃要
廿又世不元原紅絢の月拭ひ　友簾

離附

田園しめて茂の年拭
子ハいつゝまもゝとて居ゝる糸車　雀媛女
一人ハ結ひて出ゝ人洗ゝ者
夕日くゝや樹小鶏の牛所洗ゝる　呉龍
塞菊のるゝ切もゝと角もゝ可

元

元らまて後乃雛をゝ五所
彼岸ハ移も変ふ仏ゝ空　霞外
ゝゝし紅雛ゝ角力ふぐまゝゝく
雛人ハ移文ゝ世や　琴壺
星徳井の底ハ果らぬさゝ空
翌ゝて垂ゝたゝゝと占ひ　玉英
元ゝゝむゝ茂小昔の恵ゝて
、ゝ舟ハ釜の居子も泥の中　煮蓬

事沢の実事寒し兼ねて
嫌いなるものも吉兆の好
出かしの貴は八面を扇無　可充
今おもひつるまゝ古人乃面
はまつ猪罵ふ江へ物語　皇雅
塚ふ江つらぬる人も無き
るの背ハ寄くの反加減　汁溟
何やら指さ庭積乃言
紙屋し経さ物と携帯しくま　松十

酌ハ腰ふかし
恋ひの理ハ絵のまもきつちと　素外
何徒まる花出家侍
落乱のたまう祈るくんせあさ　李つ
寄さうふ古の絵も乃毒
落雷さつふかもたて　壺外

逆附
酒ふ於てハ無ものふし

孫太郎助てゝらひ年乃夏　亀幸
神ゝ社ゝ内ひさかたなる柳腰
さくらの枝を立通せる地　文賀
偏辻半を地蔵様くゝ
辻剣の鬼ゝ様まもゝけ来て　素徳
廓乃変の者とゝ乃くら
物ゝ八隣はくらの傳者の者　素隣
、
紡来もゝろゝ者のやゝ多人

睡まてゝ上ゝ胸乃火　何素
六町丹ても里八走ら嵯
好事もゝを也る孝行　素行
なくゝ丹のゝ者くゝと素書者
曲ら鬼と乗賀棒の先生　市外
大根おろして餅乃くゝくら
又孫て来くゝやら素太四ゝるゝ　従一
豆腐もきれゝ雨乃今夜
江戸中ゝ鰐くゝ雲日ゝ疾ゝ　意脇

まくのとをつまりもあるは後無さ　　廉富

梟十分小大系乃伸

春ととハ思ふ沢辺も好事を　　素粒

ちるるの外ハ存ぜぬこの武士

夜桜を朔日ちらさのむ立と

父母在まさしく桜ひ等限　　義粒

何となく繋花の地さく然ぬ書　　素外

浦乃笠屋も見ぶハ酒

真之表八章

又うへも門高や半月神社夾　　守武

何ともいかえ乃松かさも朔　　素外

旅ゝ旬花八時雨世しなかと

今ゝ行ゝ多朝も紅ら絶を

野宮の秋清く深なのし

いよ〳〵時月通ア雨ら

京ゝる寺ゝ寺ゝらけゝる聖時日

物侍むしの声乃農やの

添

離

従

添

行くゑ六章

違附　宗鑑

かけをゑハ雨ふもおよ枝ゑ法月

離　吹くゑ風ふくゑ来る雁　袁外

添　ゆくゑ秋松ゑ来陰ふ茎ゑ

従　めくゑ〳〵てゑ又ゑもくゑの亭

離　萱切の神源やゑふゑてふされ

まくゑ茅ゑ色藤ハ咲ゑもくゑ

草同ハ章

笠ゑ角ゑうき世ハ車百合　梅菊

素　かくゑ〳〵ものよゆくゑ帷子

離　川風ふ夕日ゑ乃ゑや晒ゑらん　袁外

添　伯ゑ鳥ハハ我ゑの姿も乃ゑ

離　盃ゑを手ふ左ゑふ法くゑからイ

添　茶ハ陽氣の高ひ我ゑし

離　郭きゑ〳〵雲乃陰ゑ日の月ゑ

従　ゆゑやゑめけゑ秋のゑゑゑ

附録下巻終

四時の景物一巻の太録八流く先人の著述有て用をなすもの
多と発句又附合乃句をよむ小八年く好きを学ぶ集興諸
家の文章小も盈ぬ人されと初学道小入便ともおさむ書
稀なるべきを乞名常小其撰にから因ぬく老師の心小ふたよそ
ふるひ此集小アそやしのまを小扶書を命せらるるふ八日を数
演ぶる小平話小して詳らかなる事 誠小流道の規則学ん
多引種ふらんと一島井遥瀬雀躍して其志を小謹書

文化四年丁卯季夏

距明治丈年乙酉七十九年

金花堂藏板目録

日本橋南通四丁目 須原屋佐助

源氏物語忍草　五冊　成島公序

此書八源氏物語一部の大意を初学の為ぬ作やすらんとて
小耳ちり紀とそ小ゆく所とし多なり源氏を学ぶふ
人ら必ずまなびよみ味ひ作ふべき書なり

源氏百人一首　一冊　黒澤翁満大人著

此書八定家卿ふ小倣ふ色紙小ふ小ふ源氏物語の中より百人を
撰びおのくその名所一首づを出して其女子の上より意
やうふ注釈を加へら也こうり本書ふ大部のものなるに
ふ其書ふよりくく源氏の大意浅さとうふべし

唐物語　一冊

西行上人作
清水濱臣大人標注

古の書ハものこと〻れ物語どもを日ノ国のことぶやもてはやし
ものゝ〻ろく書かゝ〻る事多り西行上人の作なりしと云伝へ
いと実ふ久敷事絶たる物語なれとも近頃大江の流なり

萬葉楢落葉　五冊

正木千幹大人輯

此書を欲よこ物くんとする初学の人ハ萬葉集の清
濁ものゝ〻ろく紛しき詞を尋ねもとめ考へ出せる五巻とも

一の巻　天武の郡
三の巻　神祇雑歌　人麻呂郷　二の巻　地儀の郡
四の巻　服食養生　五の巻　鳥獣草木の郡

庶幾よ初学く欲学者ハ考究ふ悟へき書なり

古今選　本居先生輯

村田並樹大人校

此書ハ本居大人平よりの考へ古人の先哲ハ一代集の中より
とり不出ぬ歌を撰びとり出て考へ古人の考へ方の
なるを本もとて物せる書なり

類題和歌補闕　六冊

加藤古風大人撰

古代書ハ世不行ろく類聚和歌集の題のみあげく奇乃
風ふる二千之百餘首なり代の勅撰ふ和歌の集平合考どより
考へ行さまゝ〻なるよりむ人のうゝ〻ハ机上なりの知らるべ
き書なり

古今和歌集新校正　二冊

賀茂翁考正
鈴屋翁再訂

後撰和歌集　小本　二冊

新古今和歌集　小本　二冊

古今和歌六帖標註　六冊

契沖阿闍梨　平由豆流
加茂眞淵翁　校本　山本明清　校正

[illegible]

近葉菅根集　全五冊

[illegible]

紅鏡中乃心　全二冊

千鳥之蹟

中臣親満大人著

[illegible]

うぶやう色用

小本緑色摺一

[illegible]

正誤假字遣

懐中横本一冊　賀茂季鷹縣主輯

此書ハ古事記日本紀萬葉集和名抄あるものとづきて詞乃假字をのゝはあ〜てゝ引出せる便あり〜む

假字便覽

一冊　大野廣城先生輯

此書ハ[illegible]假字考と略ふ[illegible]ものと[illegible]より字音假使までは例家を[illegible]ひの書使いあふまゞひへの音使ゝえゐゑ[illegible]ゐ数をとりやすきやうにとまとめる書なり

言元梯

一冊　大石千引先生著

古の書ハ何れその義を詳ふ考字あらはしてるなり[illegible]言ハ[illegible]の[illegible]ふ〜用ゐ[illegible]詞の[illegible]を[illegible]る例ゝ一切[illegible]字音の[illegible]例[illegible]を詳ふそ[illegible]ハ[illegible]ふ考かゝりて検索便あり〜む

岡田眞澄大人著
鵬齋先生漢文序
濱臣大人かな序

假字考

此書ハ假名ハのと草書[illegible]ようあるを[illegible]ひ[illegible]ゝ其源の久[illegible]ふ[illegible]ゝ[illegible]ふ古人の書[illegible]ものあるを[illegible]人よりも古ふ義ある事なり

新朗詠集　一冊　真海柏木先生輯　素堂山本先生校

此書は始め上皮氏帝より中保元の比までの人物撰び其時世のおもかげを考へ出せる一ふ幸基のごとく考へ出せるものなり

歌仙繪抄　一冊　藤原正臣先生著　喜多武清先生摸畫

此書は俳諧の家情及び奇のかたちとなれるとして繪とも幸号りて武清先生のもとより出くるなり

元和帝御撰集外歌仙　一冊　一名近代歌仙

先ごろ世にもてはやされし後れ毛の上皇の撰ばせ給ふ東福門院の摩尼殿おさもとの手奇絶なる繪ふ添ふの姓名を附しなり

岸本由豆流大人著　上佐日記考證　全二冊

此書は古記考証あれ世よ約つる且て考証且ちく記るものなるを李吟法帝契沖阿家梨義淵義寛宣長村田春門等の人の説と漢あげまくるべき紀をも加へ第十五編を校正しくべ仕見光の筆とらべ世に岡崎ふ感うるべんばあるべし

更科日記　二冊

賀茂真淵翁歌集　小本二冊

橘千蔭翁歌集　小本二冊

平春海翁歌集　小本二冊

播千蔭先生手本類

新百人一首　かな書
須よの員をゝ　かゝ夫

山居帖　同

大歌所御歌　あるかな

萬葉新採百首　同

湘雲帖

新三十六歌仙　かな夫

古今集かな序

源氏ゆきう比ふりかな

真草千字文

呉竹帖

俗用手簡

同先生用筆大中小色々

松花堂龍本猩々翁手本　六句帖　氣霽帖

紀貫之朝臣の書　石摺

此書ハ堤中納言家集輔仁の家集を紀貫之の書うつしの稀なる物にて極小字にて仮字ばかりなり　仮字古法よう多くうつくしかりしなれども

屋代先生書艸書千字文　石摺

援山先生書庭訓往來　二冊

天民先生書赤壁賦并千字文　石摺

龍翠先生行書小學題辭　石摺

近代諸名家畫譜　全　二冊

玄對先生畫譜　山水之部　五冊

此畫譜ハ唐家光明法師大家の畫法ハ勿論畫論を其中より古家の妙を採用しる畫事百五ヶ畫家
机上ふ至ぜんバそなへべくざるものゝ

同　先生畫譜　人物花鳥之部三冊

金生樹譜　三冊　長生舍七人編

此書ハ草木繁枝の培養宜敷こと接木の法を
明らかとを為を設けく系しく述べ又法圃の樹木
を為しくその来ハを説々草本を説明しく
人ハ必熟読しくべき書なり

松葉蘭譜　一冊

此書ハ松葉らん雲紙紙ものよりの石士書ふいつりもべくく
紙葉ふ十種の為を為ひ好るの法を伝ふ

幼稚畫手本　一冊　柳烟堂主人筆

此の書も山水人物花鳥の彩ひを畫るしくふ人の為
とく柳烟堂筆のゝ是くるなり

古今名馬圖彙　繪本金剛傳

繪本勇士鑑　繪本武者揃

彫物畫手本　名家畫譜一名大和錦三冊

魚獵手引種

繪本三國妖婦傳　上編 五冊　中編 五冊　下編 五冊　合十五冊

此書は高蘭山先生の校閲なり　文藻の美の後事なり　仮名垣氏の大流行の書なり

抱一先生畫譜　一冊　彩色入善本

日光山誌　五冊　植田孟縉編

富　御山の御事八今さらいふ迄もあらねど実大変福清浄の祖嶽なる故よ泰も山ふ

神廟　奉祀あらせられて荘厳なる八世ともに知ること

神恩を奉仰ぎ奉り　今此書の作者　宮崎玉堂氏の奉考にて要を和去

あり　山もるて数十四八倍の形

夢りぐ死峠の山路ふ命まで　滅もとるく五層百尺の楼閣も

屋ものしに見えへく千巻の岩壁の山水もさらしてちぐ〳〵

まくもふ容画をかくく深山出岩の体系をに反がやるる

廣大なる重山なる事八異ふ　蓋峯巡金のやきも義ふれを

作者こゝろ真図を模写して　詳ちり十分て此古を古人を

書籍ふ考今を古形ふ　詳〳〵やもくいさくも

私をかくに為実の　御号號とい人ども

御山の事実ふ拘物ふ　動類をもゝ異ふ乃

植物ふ考るまくく甚尺すを　宮殿を飛く出ふ上木も実ふ

宮殿を飛く出ふ上木も実ふ　紀して今望五巻とする泰

神恩成書なる古事の世物ハ　仰甘ぶべき書なり

作者べき書なり

畫本勲功草前集　十冊

山崎知雄大人輯
喜多武清先生画

此書は古今の英雄豪傑の容貌あるを事績を古事記日本紀以下今昔物語宇治拾遺太平記東鑑古今記ホ数十部の国史雑史野史記録を徴とし[illegible]も不穏の説をまじえず偽字又[illegible]を[illegible]一[illegible]をよむ[illegible]ねぐく且[illegible]丁寧[illegible]の[illegible]を率[illegible]畫をこの[illegible]徳君の[illegible]あ[illegible]ぐ偽号流布の武者絵[illegible]ざるもひとしく[illegible]

後集八辺刻仕い

野總茗話　常盤潭北著　全二冊

此書は君臣父子夫婦の礼法より人倫の教訓を旨として随筆紀録ホの[illegible]たるべ[illegible]者[illegible]の法を[illegible]

革究圖考　彩色摺　大形本全一冊

世ホ革の古より武装の装[illegible]及つぎあること用ひ来[illegible]
[illegible]革の紋名[illegible]人[illegible]八革[illegible]の名[illegible]
天平[illegible]革[illegible]の内[illegible]
の革[illegible]の甲革を[illegible]の甲冑の文革を[illegible]
[illegible]日革の名目を古書[illegible]
[illegible]ある人[illegible]見ずんば[illegible]ざる書あり

伊勢貞丈先生著千賀春城先生補

軍用記　彩色圖入　全七冊

此書ハ伊勢安齊先生のうきおろしてくるこを千賀先生ハ城補
なして古画の考ヘ物るどうり故実ヒ知ル〳〵先生中荒城の
見聞遠中小袖等ヲ束帯精麁帽子烏帽子ヒ始胄の形鎧
の結方の事草多糸威毛の事具足の五ツ弓矢の形廟
図廟矢保呂麁の五ツ幕の五ツ馬具足乘馬の五ツ
旨実検の次第旨札附の五ツ感状書状持参の五ツ武者絵
後着初祝後所作の事まくも絵ハ縁
を中〳〵くる書ヲ長ク要数本ハ有て知ルべし

武器袖鏡　一冊　栗原先生著

此書ハアラユル武器ヲ圖式ニアラハシテ且附言ニ兵士ノ事ニ
付精シキ考ヘアリ

武器袖鏡後編　一冊　同　著

此書ハ甲半首喉輪ヨリ馬具旗指物等ニ至リスベテ武
器ノ圖式ナリ

武器袖鏡三編　一冊　同　著

此書ハ現在スル古甲冑五十二種ノ威色ヲ彩色圖ニアラ
ハシ甲冑製作便ナラシム

甲冑圖式　二冊　掌中本　同　著

此書ハ武林法量ニ編ニシテ甲冑ノ圖ヲツマビラカニス

弓箭圖式　一冊　同　同　著

此書ハ先生著ハス處ノ武林法量中弓箭ノ一飾リ武家方カナラズ見玉フベキ書ナリ

單騎要略　五冊　村井昌弘先生編輯

此書ハ甲冑ノ着用故實褌襯衣等付頭盛ノ緒ノシメヤウ背旗ノサシヤウ等マデオノヽ圖ヲ設ケテ詳ニサトシ手ニ携ル處ノ鎗刀器械一至ルマデ其故實ヲ明カニシ一騎前ノ要領盡セリ武家方ハサフナリ有職ノ學シ玉フ人必坐右ニ置ベキ書ナリ村井先生ハ神武迪精武學先入等ノ作者ニシテ其名高シ

校正古今鍛冶銘早見出　尾關永冨大人撰　寸珍　上下合本一冊

此書ハ大寶中ノ天國ヲ始トシテ今ノ世ニ至ルマデ千百餘年ノ間鍛冶ノ銘ヲ輯録シ殆一萬三百六十餘ニイタル古刀七千六百八十余如此多銘ヲ集シハ末世ニナキ所也カヽミ新刀二千六百八十余ナラズ見出ニ速ナランガタメ銘ノ頭字ヲいろは分ニナシ長銘二字銘ハサラナリ年号彫リシホドノモノハ其年号ヲ顕シ年号ナキモノハ其時代ヲ考ヘ年紀ヲ施シ父子兄弟子孫ヲ紀シ且梵字ハ冶工ノ信心ノ依スル處ナレバ是等ヲ顕シ亦甲冑ハ我身ヲ護ル第一ノ要具ナレバ卷末ニ妙珍家早乙女家等ノ家系并ニ鑑定ノ次第ヲ附録ス御武家方ハ云モサラナリ武器商ノ家々モ片時モ坐右ヲハナサレザル珍宝ノ書ナリ

古刀新刀 目利早手引　同撰　兩面摺

此書ハ双紋ノ掟又ハ時價或ハ切レ物并様ノ〻ナド顕シ初學ノ便リニ上ナキ珍書ナリ

古刀新刀 相撲取組　同撰　同

古今刀剣 正真便覽　同撰　折本

此書ハ古刀新刀ノ銘中心鋒ハ云ニ及ズ双紋鉋ニ至ルマデ正真ノ儘ヲ寫セシモノナレバ此圖ヲ見覽ル時ハ正作ヲ見テ立所ニ夫レノ作ト知ルヿ面染ノ人ニ逢ガゴトシ又刀劍ハ圓形ヨリ出ルヲ圖ヲ以テ顕シ且疵ノ用捨或ハ目利會ノシヤウ又ハ當同前并ニ点ノシヤウヲモ附錄シ亦劍尺ヲモ錄シテ懷中ノ重宝トス實無双ノ珍書ナリ

掌中古刀銘鑒　一冊　巨横園輯

此書ハ先ニ銘盡數多アリトイヘドモ其ト事替リ當　同前専両作一傳ノ次第珍敷作人其外吉野年号打作人及文中心鎬廣狹帽子ノ箇條脇煮鑢目造リノ様子梵字并彫物ノ次第鑒定會ノ入札ノ答ヘヨリ致シ鍛冶ノ官名作人位列鍛冶ノ系圖并名寄等ニ至ルマテ委シク辨ジ難キハ圖ヲ出シ疑敷事ハ載ズ奇大ノ珍書ナリ

武家用文章　一冊

此書ハ武家方の文章公用向の切紙ようのそうしめて冠出形出屋出結出裏白物形結納等代ホの用途ホ立るまでの巨細ありて彩〻ふくろてい〻〻ちづくの遠ひありとも大ようこの書を祝組ありてらざふる者

歴代帝王承統譜　折本　紀藩春川先生校閲

此書ハ唐虞以來清ノ道光帝ニイタルマデ漢土歴代承統ノ主ヲ系譜ニ作リテ歴史ヲヨムモノニ便リス

草聖彙辨　八冊　清朱迎陵先生摹辨　皇國水根文峯先生校字

漢土ニテ歴代ノ草法ヲ集メタル書數多アルガ中ニ此編精善ナルニ如ハナシ我朝兼明親王ノ書ヲモ此編ニオサメ出セリ始メニ二畫ヨリ三十畫ニ至ルマデノ檢字アリ此ニヨリテ字ヲ索ムベシ第八卷ニ草法母觀ヲ附シタリ草書ヲ學ヒ玉フ君子珍セズンバアルベカラザル書ナリ

明季遺聞　四冊　清鄒錫山先生著

此書ハ清ノ鄒錫山ノ手輯ニシテ明末李自成ノ乱ヲ倡ヘシ本末ヨリ清ノ閩廣ヲ平定スル事ニイタル國性爺ノ事實等コノ書ニ詳ナリ

皇和魚譜　二卷　栗本先生纂

此書ハ河魚類凡五十一種ノ圖説ヲアゲ卷二ハ河海通在ノ魚類一十三種ノ圖説ヲアゲタリ海魚ノ類近刻ニ出ス魚類ノ性味良毒ノ辨ジガタク混ジヤスキモノ此書ヲヨミタマハバ分明ナルベシ

爲己執記　一冊　羽佐間芝瓢先生著

此書ハ醫道ハ人ノ爲ニスルワザト心得ズ己ガ爲ニスルノ仁道也ト心懸レガ肝要タルヿヲ辨ジタル書ナリ

老婆心書　二冊　同　先生口訣

此書ハ婦人姙娠ヨリ小兒出生無病ニ成長セシムル手當溫涼調理飲食好惡宜忌等ヲ平假字ニ書シテ心得ヤスカラシム

張氏醫通　廿七冊　明張路玉著編

附　本經逢原。診宗三昧。傷寒讃論。傷寒緒論。傷寒舌鉦。兼證折義。

西音發微　二冊　柳圃先生遺教　大槻玄幹先生著

此書ハ和蘭書飜譯ノ時西洋語ニアタル和音唐音ヲ撰ビ對註ノ仕樣ヲ詳ニサトシ西洋字原考ヲ附シタリ

縣居雜録補抄　一冊　賀茂真淵大人著　長野美波留大人標註

元此書ハ賀茂翁の書どの成とのくるふちくひてゐるもとのもとゐりいでゝ八十餘年ばかりの大人の標註しるたる賀茂の翁のあちらへうふ美波留大人の標註しるたる和漢數百部の古籍をしらべ考へ合せ考へあらべふところをもまじくくゝ付出のでゝ久のちゝ一日も生存よりありざるべからずまじきものなり

穂立手引草　一冊　醉吟居主人編

言志録　一冊　佐藤一齋先生著

足利家武鑑　一冊　間鐘先生校

五百崎出の評判　一冊

諷本百二十番（観世織部太夫校正　寸珍本薄用）　全三十二冊　同外　近刻

小説土平傳　一冊　江戸町鑑　三冊　江戸町づくし　一冊

袖珍名鑑　一枚　早引二體節用集大成　全一冊

大寶百人一首紅葉錦　全一冊　桃花百人一首　仝

錦百人一首（書後山流彩色入）　仝　茅窓古帙掾　仝

百瀬商賣往来　仝　同みやこ名所往来　仝

御家流商賣往来　仝　実語教童子教　仝